

# Wake App! 日本から来たロボティシストはUber/Lyftのユーザの命を守るアプリを開発している

Kazu Komotoは日本から海を渡ってきた気鋭のロボティシストであり、現在はアメリカの人々の安全を守るために奮闘している。彼が10年ほど前に初めてカリフォルニアを訪れたとき、アメリカの公共交通機関は東京と比べて利便性やサービスの質がとても低いことに驚いた。昨年再びアメリカに戻ってきたとき、彼は交通インフラとして浸透しつつあるライドシェアリングのサービスを利用した。ライドシェアリングは彼が10年前に感じた交通問題に対する解決策になり得る。しかしながら、それを真の解決策とするためには未だ課題が残されていると彼は感じている。

2015年11月、Kazuの運命を決定づける出来事があった。彼がライドシェアリングのサービスを利用して移動しているとき、あと少しのところで衝突事故に合いそうになったのだ。「ドライバーに大丈夫かと聞きました。すると、ドライバーは運転中に眠りに落ちてしまったと答えたのです。」Kazuはその場を思い出しながら語った。「ドライバーの反応はまるで飲酒運転者のようであったため、ショックを受けました。そして、私は多くの人々が同じようなリスクを日々抱えていることに気づいたのです。」

交通安全を推進する米国の非営利団体AAA Foundation for Traffic Safetyによれば、居眠り運転に起因する事故は米国内で年間32.8万件発生しており、そのうち6千件は致命傷に至るものだ。また、National Sleep Foundationの研究によれば、1.7億人を超えるドライバーが運転中に眠気を感じており、そのうち1億人以上が実際に運転中に居眠りをしてしまったことがあることも明らかになっている。更には、居眠り運転は飲酒運転と同程度のリスクを孕んでおり、十分に注意すべきであるということも指摘されている。

Kazuのやるべきことは自ずと決まっていた。アメリカの人々の安全は今やアマチュアドライバーたちの手の中にあり、彼はそのドライバーを支援するための専門知識を備えていたからだ。「シリコンバレーに来てから学んだことは、事故が起こったからといって非難したり規制したりするのではなく、解決策を自らの手で生み出すということです。この素晴らしいシェアリングエコノミーを単なるブームで終わらせないために。」と彼は主張した。

先日App StoreにローンチされたDrowsy Alarmは、スマートフォンのフロントカメラを使い、コンピュータビジョンの技術に基づいて、運転中のドライバーの顔と目を検出することができる。ドライバーがうとうとすると、アラーム音が鳴るという仕組みだ。ドライバーはほとんどのUber/Lyftのドライバーがしているようにスマートフォンをダッシュボードなど運転席付近に設置し、アプリを立ち上げるだけでサービスの利用が可能だ。特に追加のハードウェアを購入する必要は無い。

Kazuの着眼点は彼の故郷での経験から生まれたものだ。日本を訪れたことのある人は誰もがその先進的なタクシーのシステムに驚き、まるで執事を雇ったと錯覚してしまうような質の高いサービスを経験したことがあるだろう。日本のタクシードライバーは

白い手袋を着用し、乗客のために礼儀正しくドアを開けてくれる。また、道を完璧に覚えており、加減速の動作は静寂そのものだ。彼らはプロフェッショナルとしてのトレーニングを受けており、決して運転中に居眠りをするようなことはない。これが、Kazuがアメリカの人々に提供したいと考えている安全の基準だ。

彼のロボット・自動車エキスパートとしてのキャリアは、大学院での日産自動車との共同研究から始まった。彼は自動運転の到来を見据えた新たなシステム・デザインを探求していた。運転支援システムや自動運転の研究に従事したのち、彼は経営とテクノロジーのコンサルタントとして、日本企業向けに次世代交通システムや自動運転に関わる新規事業の創出を支援してきた。その後渡米し、彼は自分の製品がAT&T Smart City Hackathonで受賞するなど、アメリカで評価され始めたことを嬉しく思っている。

居眠り運転防止向けソリューションの採用は急ぎ取り組まねばならない。交通システムのエキスパートは、ライドシェアリングエコノミーの拡大によって多くの人が運転を止めたが、その一方でドライバーを務める人の一人あたり運転時間は増加しつつあり、結果として交通事故の発生件数は今後増加していくと指摘している。UberやLyftはドライバー向けの自動車保険の整備に動いているが、保険は彼らの命を守ってくれはしない。現在、“Drowsy Alarm”はApp Storeで無料で手に入れられる。Kazuの長期的なビジョンはコネクテッドカー向けの統合ソリューションの開発によって道路上の事故発生を減らすことだ。彼はビジョンに共感してくれるアクセラレータやベンチャーキャピタルとの話を始めている。